２０１６／０１／２４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：敵であるサタンの敗北　①
聖書箇所：黙示録１２：１－４

どうぞヨハネの黙示録１２章をお開きください。
前回から私たちは第七の御使いがラッパを吹き鳴らした後に、何が起こるのかを学び始めました。神が約束されていた最後のさばきが下ろうとしているわけです。遂に主を信じるすべての信仰者が待望していた神のさばきの下る時が訪れ、「**第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。**」と、１１：１５から記されていました。前回我々は見ましたけれども、この後、さばきの詳細は記されていません。この後どういうさばきを神様が下されるのかを見ることを我々は期待するわけですが、実はそのことは１６章にならないと出て来ません。そして一つ前の１５章を見ると、まさにその最後のさばきの序章とも言えるような、最後のさばきに対する備えが記されています。でもそこにならないと、この最後のさばきを見ることができません。

☆　さばきが下される原因：サタンに関すること

では我々が今見ようとしている１２－１４章でみことばは何を教えようとしているのかというと、一言で言うならばここにはさばかれる理由が書いてあります。先ほどもお話ししたように最後のさばきが間近に迫っているわけです。その時、説明するまでもなく罪がさばかれます。この１２－１４章を見る時に、そのさばかれる罪の中でも特にサタンに関することが記されています。神は天地万物が造られる前から患難時代の終わりまでの非常に長い歴史を通して、特にサタンの罪を明らかにして行かれるのです。ですからこの１２－１４章を第七のラッパの後に起こる出来事として解釈すべきではありません。最初にお話ししたように、そのことは１６章になって明らかにされて行くわけです。

◎　「しるし」

１２：１を見ると、「**また、巨大なしるしが天に現われた。**」と記されています。ヨハネがしるしを見たというのは、「**別のしるしが天に現われた。**」と３節にもあります。また１５：１にも「**また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。**」と記されています。ではこの「**しるし**」というのは一体何なのかです。「**しるし**」と訳されていることばは、辞書で見ると「不吉」、また「重大事の兆し」とか「前兆」というふうに訳してくれます。確かにそのとおりで、「**しるし**」と訳されているところは使徒２：１９や黙示録１２：１、３、１５：１です。「前兆」というのはルカ２１：１１、２５に出て来ます。皆さんにわかっていただきたいのはその後です。この「**しるしを見た。**」の「**しるし**」ということばを聞くと幻や夢というふうに思われる方もおられると思います。でもこの「**しるし**」というのは、例えばヨハネが眠っている時に見た夢や彼が思いついたことでは全くないということです。

では一体「**しるし**」とは何か――。実はこれは神がヨハネに示されたものなのです。神がヨハネに明らかにしようとお考えになられたことを神がよしとされた時に、神だけがなせる超自然的な方法でもって示されたことなのです。「啓示」とよく似ています。啓示というのも我々人間がどう努力しようと我々自身では全く知ることのできない真理を神が明らかにされたから知ることができた。まさに「**しるし**」というのはそういうものなのです。神様が働かれたゆえにそのことを知ることができたのです。ですからヨハネに示されたのは神ご自身なのです。

またこの「**しるし**」とは、あるもののシンボル、象徴です。しるしは実態そのものではないけれども、実態が存在しているのだということを明らかにしてくれるものです。例を挙げます。この２６号線を走っていると、あと何キロ行くと何とかレストランがありますというサインがあります。そのサインを見た人はそのサインをレストランとは思いません。そのサインはあくまでその後にそのレストランが存在していることを明らかに示しているわけです。ですからそのサインを見たら、あと何キロ行けばこのレストランに行くことができるかを知らせる働きをしているのです。「**しるし**」はその象徴するものが事実であることを明らかにしているのです。

１節を見ると、「**巨大なしるし**」と書かれています。これは、その「**しるし**」の大きさというよりもその「**しるし**」の重大さを教えようとしています。ダラス神学校の元学長であったジョン・ワルブード先生は「しるしとして、それらは神が間もなく明らかにされるあることの象徴であった。そしてそこには普通預言的警告の要素が含まれている。」と言われました。これから起こることであると同時に、そこには神からの警告が含まれていると。

最初にもお話ししたように、神様はまさに創造の初めから患難時代の終わりまでに現れる者たちを挙げています。先ほどのワルブード先生は「登場人物」という非常にいい表現を使うのですけれども、創造の初め、人類や自然界の話ではなく、その前に天使たちが造られていますから、その最初からこの大

患難の終わりまでに出て来るというか、特筆すべき七人をここに挙げています。
◎　神様が挙げた７人の登場人物
１．「ひとりの女」　１－２節
２．「大きな赤い竜」　３－４節
３．「男の子」　５－６節
４．「天から落とされたサタンの話」　７－１２節
５．「竜に迫害される女」　１３－１７節
６．「海からの獣」　１３：１－１０
７．「地上からの獣」　１３：１１－１８節
　そしてこれらのことがイスラエルの、そして我々信仰者の、そして神の敵であるサタンがどのような罪を犯したのか、どのような罪を犯しているのかを明らかにしてくれます。
　１２：１からきょう私たちはふたりの人物をご一緒に見て行きましょう。
Ａ．「ひとりの女」　１－２節
１．ひとりの女
　１２：１「**ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。**」とあります。恐らく皆さんこれを読むとどんな人なのかと想像力を働かされると思います。まずここに出て来る「**女**」という名詞ですが、黙示録の中に１９回出て来ます。１９回中８回が１２章に出て来て、６回は１７章に出て来ます。黙示録の中を見ると、何人かの女性が記されています。
１）「イゼベル」　（２：２０）
　まず最初に出て来たのは、２：２０「**イゼベル**」という女性でした。これは旧約聖書に出て来た「**イゼベル**」という人物ではなくて、あるものを象徴していたわけです。それは自称預言者でありながら聖書に反することを教えたにせ預言者のことでした。この「**イゼベル**」は偽りを教えるにせ預言者を象徴していたのです。
２）「大淫婦」（１７：１－７、１５－１８）
　二人目は、１７章の中に「**大淫婦**」というのが出て来ます。１７：１から見ると、「**大淫婦へのさばきを見せましょう。**」と。そのことが１－７節と１５－１８節にも出て来ます。「**大淫婦**」、みだらな女、不道徳な女の話です。肉的なことではなくて霊的に腐敗した状態や霊的に堕落した状態です。これは背教した教会、正しい教えから外れてしまった教会を象徴しています。
３）「子羊の妻である花嫁」　（１９：７、２１：９、Ⅱコリント１１：２）
　三人目の女性は１９章の中に出て来ます。１９：７に「**小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。**」、また２１：９にも「**小羊の妻である花嫁を見せましょう。**」とあります。「**小羊の妻である花嫁**」という女性の話が出て来ます。主イエス・キリストを信じ、この救いに与った者たち、彼らはその花婿であるキリストの再臨を待っている。ですからこの「**小羊の妻である花嫁**」というのは救いに与った真の教会である我々クリスチャンのことを象徴しているわけです。
２．イスラエルである証拠
　さて、きょうのテキスト１２章に戻って、ここに記されている「**ひとりの女**」は何を象徴しているのかというと、イスラエルです。今から四つの証拠を挙げます。
１）呼び名
　まず一つ目は呼び名です。イスラエルは旧約聖書において主の妻であったり、また不誠実な妻と呼ばれています。例えばイザヤ５４：５では「**あなたの夫はあなたを造った者**」とあります。イスラエルと神との関係において、「**夫**」というようなことばが使われています。つまり「**夫**」である以上イスラエルは妻であるわけです。またエレミヤ３：６を見ると「**背信の女イスラエル**」とあります。またエレミヤ３：７では「**裏切る女**」とも出て来ます。また３：８にも出て来ます。エゼキエル１６：３２では姦淫を犯した婦人の話「**姦婦**」とイスラエルのことを呼んでいますし、同じくエゼキエル１６：３３では「**遊女**」と呼ばれています。「**遊女**」ということばはエゼキエル１６：３５にも出て来ます。またホセア２：２を見ると、「**彼女は**」、つまりイスラエルは、「**わたしの妻ではなく、わたしは彼女の夫ではない**」と主ご自身が言われています。神がイスラエルに対してこういう呼び名をされたことを旧約聖書は我々に教えています。ですから、この「**ひとりの女**」というのはイスラエルを指すのであろうと。
２）旧約聖書の引用
　二つ目の理由、旧約聖書の引用がそのことを我々に教えてくれます。
（１）ヨセフの夢：創世記３７：９－１０
　今１節をお読みした時に、「**ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。**」、何のことだろうと思ってしまうような話がここに記されています。しかし、旧約聖書に通じている

人々は、この１節のみことばを読むと、ある旧約聖書の出来事を思い出されるはずです。それはあのヨセフの夢の話です。創世記３７章にその話が次のように記されています。創世記３７：９－１０「:**9 ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、『また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです。』と言った。**」と、非常に似通っています。このヨセフが見た夢は、一体どういう意味があったのか、感謝なことにその後ヤコブがこの夢の説明をしてくれています。１０節「**ヨセフが父や兄たちに話したとき、父は彼をしかって言った。『おまえの見た夢は、いったい何なのだ。私や、おまえの母上、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むとでも言うのか。』**」。ヨセフは「**太陽と月と十一の星が私を伏し拝ん**」だと言ったのです。それを聞いたヤコブは、ヨセフ、お前のお父さんである私とお前のお母さんであるラケルとお前の兄弟たちがお前を拝むとでも言っているのかとヨセフをきつく叱りつけました。この夢が意味したことはそういうことだったからです。そして皆さんもご存じのように、これがまさに実現したわけです。人々は食糧を持っていたエジプトのヨセフのもとに食糧を求めて出て来るわけです。ヨセフの兄弟たちもしかりでした。確かにこの夢は実現するわけです。

（２）アブラハムの契約との関係

それを踏まえてもう一度黙示録１２章に戻ると、なぜここでこの「**女**」に関してこの話がされているのかです。ここで主がお教えになろうとされていたことは、この「**女**」とヤコブ、ラケルとの関係を明らかにするわけです。神はアブラハムに対して彼の子孫が増えること、また彼らが祝されることを約束しました。それをアブラハムの契約と言います。神がアブラハムに約束を与えたわけです。祝福の約束です。そしてその約束はアブラハムの孫であるヤコブに引き継がれて行くのです。ヤコブはイスラエルに名前が変わりました。そしてそのヤコブを通して子孫が増え広がって行ったのです。ですからこの黙示録１２：１が私たちに教えてくれるのは、この「**女**」の象徴することは、アブラハムの契約と密接な関係がある存在を指しているわけです。だれの話かというとイスラエルです。アブラハムの約束がヤコブを通し、このイスラエルを通して成就して行った。先ほど何度かお話ししたジョン・ワルブード先生はこう言います。「この女が太陽と月を着ていたという表現は、創世記３７章９節から１０節に対する言及であり、そこではこれらの天体はヤコブとラケルを表しているので、この女はアブラハムの契約の成就を表していると見ることができる。」と。ですからこの１節に記されている女性というのは、しかもここにこのようなヨセフが見た夢が記されているということは、あのアブラハムの契約と関係する人物、あえてそう言いますけれども、このアブラハムの契約が成就した対象、イスラエルを指していると。

（３）文脈：「頭には１２の星の冠をかぶっていた」　（１節）

また三つ目の証拠はこの文脈です。１節に「**頭には十二の星の冠をかぶっていた。**」と。この「**十二の星**」というのはヤコブが生んだ１２名のこどもたち、イスラエルの十二の部族を表しています。もちろんヨセフの夢の中からもそれはあるのですが、我々は７章で１４万４０００人の証人の話を見ました。その１４万４０００人というのはイスラエルの十二部族から均等に出された証人の数でした。これはまた後に出て来ます。また黙示録２１章に進むと、そこには新天新地の話があります。そこにある都には１２の門が記されています。どこから来たのかというとイスラエルの十二の部族です。ですからこうして全体を見る時に、まさにここで言わんとしていること、語られていることはイスラエルの話です。

（４）出産：（２節）

もう一つの理由は１２：２です。「**この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。**」とあります。出産の話です。約束の救世主はイスラエル、ダビデの子孫であると約束されていました。そして実際に救世主イエスはダビデの子孫から、イスラエル民族から生まれました。確かに２節はそのことを教えているのですが、よく見てみると、ここでは生まれたということは出て来ず、「**みごもっていた**」としか書いていません。ということは２節で言わんとしていることは、救世主の誕生ではなくて、ちょうど出産を控えている状態です。もっといえば妊婦さんが出産という大変な痛みを経験する話です。ここを見ると、「**産みの苦しみ**」ということばと「**痛み**」という二つのことばがあることにお気づきになると思います。最初に言ったこの「**産みの苦しみ**」というのは一つのギリシャ語の動詞ですが、今ここに訳されているように「**産みの苦しみ**」と訳せることばです。二つ目の「**痛み**」というのも同じく動詞なのですが、これは痛み以外に苦悩、苦痛、拷問と訳せます。ですからこの「**痛み**」というのは子どもを産む時の痛みというよりも、この民族が経験する大変な苦しみ、大変な痛みを言っているのです。人類の歴史の中で、最も苦しんだと言える民族、イスラエルを指しています。

ですからこうして四つのことを見る時に、この女が象徴しているのはイスラエルです。ある人たちはこれは教会だと言う人たちもいます。しかし、新約聖書の中で教会は「神の妻」や「妊婦」というような表現はされていません。そのような表現にふさわしいのはイスラエルだけです。まずこの１－２節が教える「**ひとりの女**」というのはイスラエルであると。

Ｂ．「大きな赤い竜」　３－４節

では二人目の人物を見て行きましょう。それは３－４節に出てくるのですが、「**大きな赤い竜**」と記されています。３節「**また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。**」、再びヨハネはしるしを見るわけです。これもあくまで象徴です。

１．「竜」の正体

「**竜**」の正体はこの黙示録自身が私たちに教えてくれます。黙示録２０：２に「**彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、**」と答えが書いてあります。ですからこの「**竜**」というのはサタン、悪魔です。あくまで「**竜**」と象徴的に用いられているわけで、この「**竜**」はサタンの容姿を表しているものではありません。この「**竜**」はサタンが非常に恐ろしい存在であるという特性を表しています。日本語では、サタンやデーモンといったことばが非常に軽く使われていますが、我々クリスチャンは大変恐ろしい存在だということを忘れてはいけません。そういったものに関わるものに近づいてはならないのです。

さて、この「**竜**」ということばは旧約聖書の中に１４回出て来ます。あえてそれを紹介するのは旧約聖書の中ではこの「**竜**」がどういうものなのか、異なった表現をもって明らかにしてくれています。１４回中、創世記１：２１や詩篇７４：１３、１４８：７、ヨブ７：１２は「**海の巨獣**」と訳しています。また出エジプト記７章には３回も、申命記３２：３３にも詩篇９１：１３にもこの存在を「**蛇**」と訳しています。また旧約聖書の中で「**竜**」と訳されているのはイザヤ２７：１、５１：９、エレミヤ５１：３４です。もう一つ、エゼキエル２９：３や３２：２でこの「**竜**」というヘブライ語があの爬虫類の「**わに**」と訳されています。ところが新解約聖書のその箇所の欄外に「あるいは『竜』」というふうに注釈がつけられています。タンニムというヘブライ語ですけれども、蛇であったり竜や巨獣、そういう存在だと。こういう「**竜**」ということばを使って、サタンがどういう存在なのかを明らかにしたわけです。

マッカーサー先生は「『**竜**』と訳された同じヘブライ語は、旧約において怪物または海獣と訳されている。それは大きく獰猛で恐ろしい動物を描いている」と。このことばは、そういう存在だということを私たちに明らかにしてくれているのです。「**竜**」、サタンというのは大変恐ろしい存在だということをみことばは我々に明らかにしてくれます。

２．竜の特徴

二つ目に「**竜**」の特徴です。

１）「赤」

まず「**赤**」と色が記されています。この「**赤**」という色が記されているのは、殺戮という性格を表すためではないかとジョン・ワルブード先生は言います。またマスターズ神学校のトーマス先生は「『**竜**』は大きく、そして破滅を意味する炎の色か、殺人を意味する血の『**赤**』である。」と。やはりサタンがたくさんの人たちを殺して行く、その殺人の血の色、そこから「**赤**」と記されているのではないか、また彼自身が最後には永遠の火の池に投げ込まれる、その火の池の炎のような、そこでこういう表現がされているのではないかと。

２）七つの頭と七つの冠　（３節）

次にこの「**大きな竜**」には「**七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。**」と。この「**七つの頭**」があり、そのそれぞれの頭に「**冠**」があったという話です。何の話かというと、「**頭**」とは王国の話です。そしてこの「**七つの冠**」の「**冠**」ということばは王冠を意味することばです。１２：１にも「**頭には十二の星の冠をかぶっていた**」と、確かに「**冠**」ということばが出ています。日本語では同じ「**冠**」ですが、異なったギリシャ語が使われています。３節では今お話ししたように王冠を意味するダイヤデムというギリシャ語が使われています。ところが１節では花の冠だとか競技において勝利者がかぶるステファノスというギリシャ語が使われています。全く異なる冠です。この３節で言っているのは、王様の話です。先ほどもお話ししたように、この「**七つの頭**」の上に冠がかぶせられているというのは、これまでサタンが支配してきた七つの王国、七つの国々を表しているのです。実際にそういう国々が存在しました。今からその国々の名前を挙げます。まずエジプト、アッシリヤ、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ、そして最後はにせキリストによって築かれる帝国です。

これは黙示録１７：９に出て来ます。ジョン・ワルボード先生はこの帝国のことを「ローマ帝国の再来」というふうに呼んでいます。そしてその帝国のことがこの３節に記されています。第七番目の王国には「**十本の角**」がある、これは１０人の王様、リーダーがいるという話です。そしてにせキリストが彼らを支配すると。この「**十本の角**」が王であるというのは、ダニエル７：２４が教えることです。「**十本の角は、この国から立つ十人の王**」と記されています。ですから今エジプトから始まってアッシリヤ、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ、そして最後に患難時代に誕生するこの国、そこには１０人の王、１０人のリーダーたちがいると。そしてその１０人たちをにせキリストが支配するのだと。それが最後に出て来る王国の話です。そのことがこの３節に記されています。

３．竜の働き

さて、特徴が記された後、この竜の働きが記されています。

１）天使たちへの働き：（４節）

４節「**その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。**」、これもあることを象徴しているのです。何を言っているかというと、天使たちへの働きかけの話です。サタンが罪を犯した時、サタンは多くの罪のない天使たちを誘惑し、彼らも神に逆らう者となりました。彼らも同じように天から追い出されたのです。この４節のみことばが私たちに教えてくれていることは、サタンが罪を犯して神の前から追い出された時に、罪を犯した天使たちも同じように追い出されるということです。その罪を犯した天使たちのことを悪霊と呼んでいます。確かにサタンは神の前から追い出されるのですが、皆さんも聖書をごらんになってお気づきだと思いますが、サタンは神の御前に立つことが許されています。あのヨブを訴えた時もそうでした。さまざまな機会に彼は神の前に立ち、神の人々を訴え、責める許可を求める様子が出ています。

ここにあるように「**天の星の三分の一**」の「**天の星**」というのは天使たちの話です。というのは黙示録９：１に、「**一つの星が天から地上に落ちるのを見た。**」と書いてありました。空に輝くスターの話ではなく、この天から落ちた星はサタンでした。ヨブ３８：７には「**明けの星々が共に喜び歌い、**」と書いてあります。これは天使たちの話です。また黙示録１２：７－９を見ると、「**天に戦いが起こっ**」たと書かれています。「**ミカエル**」というよい天使たちの長と「**竜**」が戦う。つまりよい天使たちとサタンとサタンに仕える悪霊たちとの戦いの話です。そこで、この「**天の星**」つまり天使たちの「**三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。**」というのは、サタンが罪を犯した時に、天使たちの三分の一を引き連れて彼らを地上に落としたと。天使たちがどれぐらいの数存在するのか、詳しいことは聖書が教えていませんから、わかりません。ただ我々が黙示録を学んで来て、２億の天使たちが人々を滅ぼす話が出て来ました。大変な数の天使たちが存在すると。その全天使たちの三分の一が神に逆らいサタンに従ったという話がこの４節に出て来るわけです。

２）救世主への働き：（４節）

さて罪を犯し、多くの天使たちを罪に陥れたサタンは、この後「**また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。**」とあります。サタンは天使たちへ働きかけただけではなく、救世主に対しても働きかけをするのです。「**子を産もうとしている女の前に立っていた。**」、なぜそんなことをしたのか、理由は、「**彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。**」と書いてあります。この「**子**」というのは救世主です。先ほども見て来たように、救世主はこのイスラエルから人として生まれ出て来ました。サタンはその救世主を殺そうとねらっていたという話です。この「**子**」、救世主が生まれる前からそのことを企てていたことがここに記されていました。これまでの歴史を振り返ってみると、まさにそのことが繰り返されていました。

・　ヘロデ王は２歳以下の男の子を殺した　マタイ２：１３、１６

ヘロデ王様はなぜ２歳以下の男の子を殺すことを命じたのか。「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこに**」おられますか？それを聞いた時にヘロデは非常に恐れを抱いたわけです。自分の王座が危うく感じられ、東方の博士たちに「どこにいるか分かったら教えてくれ、私も拝みに行くから」と言いました。拝みに行くことが目的ではなく、生まれた救世主を殺すためにその場所を探り当てようとしていたわけです。神はその東方の博士たちを帰され、だまされたことに気づいたヘロデは２歳以下の男の子を全部殺せと命じるわけです。こうしてサタンは彼を用いて救世主を殺そうとするのです。でも感謝なことに、この難を逃れるために神は彼らをエジプトの地へ送りました。そしてサタンのこの計画も神の前では全く空しかった。サタンはこうして自分にとって最も厄介な存在、救世主を殺そうと企み、試みましたが、見事に失敗に終わるわけです。

・　サタンの誘惑――主が罪を犯すように　マタイ４：１－１１

二つ目の出来事は、主イエス・キリストが４０日の断食を終えた後、サタンが彼を誘惑しました。マタイ４：１から出て来ます。サタンは主が罪を犯すようにと主を誘惑しました。なぜならもし主がそこで罪を犯したならば彼の贖いは全く効力を失うからです。こうしてサタンは何とか主イエス・キリストが罪人に救いをもたらさないように働きかけるわけです。でもそれも見事に失敗に終わりました。

・　ナザレの人々はイエスを殺そうとした　ルカ４：２８－３０

三つ目に考えられるのは、主イエス・キリストはベツレヘムでお生まれになり、ナザレで過ごされました。ルカ４：２８－３０にイエスがナザレに戻った時に、ナザレの人々は彼を歓迎したかというと、みんな口ぐちにあのイエスの家族のことを知っていると言いました。人々はイエスに対して尊敬を払うことはなく、かえってイエスを殺そうとしました。こうしてサタンは巧妙に彼が育ったナザレの地において彼を殺そうとするのです。しかしこの試みも失敗に終わりました。

・　**十字架に掛けた：「贖いを阻止しようとした」　ルカ２３：１８－２３**

次に挙げることができるのはあの十字架です。ルカ２３：１８に、群衆はイエスを「**十字架につけろ。**」と言った。なぜそう言ったかというと、この厄介なイエスを十字架で殺してしまったら、これでもう心配はなくなる。しかしそれこそが神のご計画でした。主イエス・キリストがみずから進んで十字架に架かり、そこであなたや私の贖いをなしてくださることによって我々人間に、罪人に完全な救いが備えられた。サタンはイエスを殺して、もろ手を挙げて歓喜の声を上げたでしょう。しかしそれは敗北の出来事でした。サタンが神に敗れたのです。当然の話です。

・　**墓の番をさせた：「復活を阻止しようとした」　マタイ２７：６２－６６**

こうしてサタンは巧妙にこの救い主を何とか殺そうと試みてきました。主イエス・キリストが亡くなった後、墓に納められました。みことばが教えるとおりまっさらな墓でした。（マタイ２７：６２－６６）祭司長たちはその墓の番をするようにと願い出ました。キリストの復活を阻止するためにです。しかしイエス・キリストが約束どおり三日後にその墓から肉体を持って完全によみがえり、ご自身が神であり、救い主であることを明らかにされた。

サタンは間違いなく神の敵だとお気づきになったと思います。なぜならサタンは繰り返し神のみこころに反することを行なって来ました。彼はこの世の神として君臨し続けたい。そこで常に神のみこころに反することをなし、人々が同じように神のみこころに反するようにと誘惑し続けるわけです。だとしたら、この策略を知った私たちクリスチャンはいま一度心にこのことを刻むことです。サタンがそのことを望んでいるのだったら、私たちはこれまで以上に神のみこころに忠実に従う決心をすることです。サタンがしたいことは、それがクリスチャンでもそうでなくても人々を惑わし続けることです。ここにもしクリスチャンでない人がおられるとしたら、間違ってもあなたがこの救いに与らないように彼は誘惑し続けます。そしてあなたがクリスチャンだったら、あなたが主のみこころに従って行かないようにサタンは誘惑し続けます。間違ってもあなたが主の栄光を現わすことがないように、彼は働き続けるのです。それが彼の策略なのですから、我々信仰者は主のみこころに従うことによって我々が救われ、生かされている目的をしっかり果たすことです。主の栄光を現わし続けることです。この主こそがまことの神であり、唯一の救い主であることを明らかに示し続けることです。この方だけが唯一の希望であることを私たちが明らかにし続けることです。

主があなたのうちになそうとされている働きとは、あなたを通して神がどのようなお方であるかを周りの人々に示すことです。神はあなたを通して救われることがどんなにすばらしいことであるかを明らかに示そうとされています。神はあなたを通してこの神の偉大さを示そうとされている。だから私たちはこの方のみこころに従って行こうとするのです。ただみことばを聞くだけの者から、みことばを聞き、その真理を日々の生活に適用して、そのように生きて行こうとする。そうして私たちはこの地上にあって主によって贖われた目的を果たすことになるのです。そのように生きることによって私たちの神を明らかに示して行くのです。サタンの策略を知った今、我々信仰者ひとりひとりはいま一度このことを決心すべきではないでしょうか。私はこれまでよりも、より熱心に、より忠実に主に従って行こう、残された人生、この私を救ってくださった主の栄光をしっかりと現わすためにみこころに、神が与えてくださったみことばに従って行こうと。そうやって生きて行きましょう、信仰者の皆さん。間違ってもサタンに誘惑され続けることのないように。主のみこころに逆らうことをもって神を悲しませることがないように。

きょう私たちはサタンがどんな働きをしているのかを見て来ました。彼がどんな存在なのかを見て来ました。この真実は私たちがきょうからこれまで以上に主に対して熱心に生きて行くことを私たちにチャレンジしてくれます。そのようにしっかりと歩んで行きましょう。

《考えましょう》

１．「しるし」とは何かを説明してください。

２．「竜」とはだれのことでしょう？

３．サタンは何度も主イエスを誘惑したり、殺そうとしました。その理由は何でしょう？

４．きょうのみことばはあなたにどのような励ましと確信をもたらしたでしょうか？それを信仰の友と話し合い、祈り合って、今週の歩みにみことばを適用してまいりましょう。